ESD Award 2018

第4回ESD大賞
受賞校実践集

主　催：NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム
後　援：日本ユネスコ国内委員会／株式会社教育新聞社

はじめに

ESD（Education for Sustainable Development）は、「持続可能な社会の担い手を育む」教育と言われています。

地球上の様々な課題を、自分たちに関係のある事としてとらえ、『持続可能な社会』を目指して、身近なところから課題解決に取り組もうとする人材を育成し、意識と行動を変革することを目指す教育です。

NPO法人日本持続発展教育推進フォーラムでは、このESDの理念に基づく取り組みを積極的に実践する学校を奨励する「ESD大賞」を平成22年度に創設いたしました。

本事業は、全国のESDの優れた実践を奨励するとともに、その輪を広げ、日本の持続可能な社会の構築に参画する人間づくりの推進に寄与することを目指しております。４回目となる今年は、全国の小中高等学校48校より、ご応募をいただきました。（小学校20件、中学校19件、高等学校９件の計48件）

多くの優れた実践から受賞校を決定することは困難ではございましたが、第４回ESD大賞として、６校の学校を表彰し、ここにその実践をまとめさせていただきました。

本冊子が少しでもESD実践の参考・発展へつながり、持続可能な社会の担い手づくりに寄与できれば幸いです。

なお、第４回ESD大賞は、カシオ計算機株式会社様よりご協力をいただきました。

第４回ESD大賞　受賞校

ＥＳＤ大賞
福島県立安達高等学校

ユネスコスクール最優秀賞
愛知県知多郡東浦町立緒川小学校

小学校賞
多摩市立多摩第一小学校

中学校賞
新潟大学教育学部附属長岡校園

高等学校賞
立命館守山高等学校

審査委員特別賞
岡山県立和気閑谷高等学校

【講評】　佐野　金吾　ＮＰＯ法人日本持続発展教育推進フォーラム 理事

ＥＳＤ大賞は「各学校において正しいＥＳＤの概念に基づいた教育が積極的に実践され、持続可能な社会の構築に参画する人間づくりの推進に寄与する」ことを目標として平成22年に設けたものです。
過去3回、多くの学校が優れた実践活動とその成果を応募してきましたが、今回は48校の応募がありました。各学校の応募書類からは、いずれもＥＳＤ大賞の目標実現に向けた熱心な取り組みの様子とその成果を読み取ることができました。

審査に当たっては、ＥＳＤ大賞の目標とＥＳＤのねらいに基づいて審査の基準を次のように定め、審査委員の合議によって各賞を決定しました。

① ＥＳＤ大賞の目標を実現するための教育活動を組織的・計画的に実践し、その成果を応募書類から読み取ることができる。
② ＥＳＤについての指導内容・方法等に関して工夫改善された新しい提言が行われている。

なお、賞から外れた学校にも優れた実践が多くありました。各学校におきましては今後一層精進され、ＥＳＤの発展・充実に向けた取り組みとなることを期待しています。

ＥＳＤ大賞 … 福島県立安達高等学校

東日本大震災後の当面する様々な困難な課題を克服し、力強く生き抜くための考え方や姿勢を身に付けさせることをねらいとして「復興教育」に取り組んできた。現在は「復興教育」にＥＳＤを加えた未来志向型の「創造的復興教育」としてカリキュラムを整え、組織体制を充実させ、日常の学習活動・教育活動の充実に努めている。

ユネスコスクール最優秀賞 … 愛知県知多郡東浦町立緒川小学校

ＥＳＤの要素を取り入れたカリキュラムに全学年で取り組んでいる。今年度からは「自然とのつながり」、「社会とのつながり」、「人とのつながり」をテーマにして教科等の学習内容との関連を整理した「ＥＳＤカレンダー」を作成し、地域と連携した体験活動、ＥＳＤ環境の整備などの活動によって地域と一体化を図る教育活動を展開している。なお、ＥＳＤの視点を取り入れた評価規準「ＥＳＤに基づいた学習計画」の作成は高く評価できる。

小学校賞 … 多摩市立多摩第一小学校

多摩川の自然環境や地域の特性を生かした教育活動に全校で取り組んでいる。生物の多様性、地域文化、異文化理解等について体験活動を重視した探究的な学習活動を各学年の発達段階に応じて展開し、課題発見・予想、計画・調査、まとめ、発表等の能力を培い、問題解決力の育成を図っている。なお6学年はスウェーデンの小学校に対して学習の成果を発信する取り組みをしている。

中学校賞 … 新潟大学教育学部附属長岡校園

文部科学省の開発学校として特設した教科「社会創造科」による実践である。「社会創造科」は、「自己を推進すること」、「相互に交流すること」、「新たに開発すること」などの資質・能力を育成することをねらいとしている。幼小中一貫カリキュラムによる取り組みを進めているが、応募は第5ステージ（中2・3）によるものである。地域に伝わる「長岡野菜」のブランド化を図るため地域の人々と一緒に取り組む中で、生徒は人々の地域に対する思いや願いを共有し持続可能な社会に必要とする認識力等を身に付けている。

高等学校賞 … 立命館守山高等学校

「総合的な学習の時間」を活用して国際協力、貧困層自立支援、異文化理解に取り組んでいる。応募した実践活動はバンコクにおけるボランティア活動に関するもので、現地のスタッフの協力を得ながら貧困地区に家を建てる取り組みである。生徒は、この体験から当面する課題に真摯に向き合う態度やボランティア活動に対する積極的な行動力を身に付けている。

審査委員特別賞 … 岡山県立和気閑谷高等学校

生徒会が主体となって地域に貢献できる力を身に付け、自主的に行動できる資質を育むことをねらいとした実践活動である。生徒会が主催するボランティアは従来からも様々な活動に取り組んでいるが、2011年より地域の人々が誇りとし、学校のルーツでもある旧閑谷学校に注目して生徒会が主体となって「閑谷ボランティアガイド」への取り組みを始めた。生徒は積極的に参画・行動する中で主体的に行動する力や問題解決能力を身に付けている。

ＥＳＤ大賞

福島県立安達高等学校
教諭　對馬　俊晴

ユネスコスクール加盟と創造的復興教育への挑戦

１　はじめに

東日本大震災後２年半が過ぎ、県内の学校は漸く落ち着きを取り戻しつつあるかのようである。しかしながら、長期戦に突入したと言えるこの状況の中にあっては、震災前の普通の生活に戻すということだけではなく、福島で学ぶ生徒たちに、いかに現状を乗り越える力を育成できるかといった重い課題が突きつけられている。福島県の抱えている問題は多岐に渡り複雑に絡み合い、学校教育が及ばないところが多々存在するのが事実である。しかし、この状態の中でも一生懸命学習活動を続ける生徒たちが目の前にいることは確かな事実であり、学校は現実から目を背ける訳にはいかない。さらに、国・県の対応や学校教育を信じて育つ子どもたちに対して、福島で育ったことがマイナスであったという思いを感じさせることは絶対に避けなければならない。今となっては、むしろ福島で育つからこそ、将来の自分自身や日本・世界のことを真剣に捉え、持続可能な未来のために必要なことを考えさせるといった教育を追究していくべきと考えている。

このような中、昨年度から現状を乗り越えるための「復興教育」を展開している。福島県の現状をエネルギー開発の事故という見方をして、これからのための有意な教訓を得ようとしたとき、将来、エネルギー資源やその他様々な生活資源の枯渇は容易に予測され、いかに社会を持続可能なものにしていくかという観点を強く認識せざるを得ない。そこで、我々の定義として、現状を分析しながら復興を期する「復興教育」に加えて、ESDを教育活動の中心に据えた未来志向型の取り組みに発展させた形を新たに「創造的復興教育」として位置づけ、積極的な展開を目指している。さらに、こうした取り組みを後押しされるように、昨年12月には、本県で初となるユネスコスクールの承認を受け、校内の組織的な取り組みが実践されている。試行錯誤ではあるものの福島県でのESD実践は、本県だけの問題にとどまらず、地球規模において天災や人的事故等、今後も生じ得る社会の発展を持続不可能にする様々な要因を解決しようとする糸口として、貴重な実践事例の１つになるはずである。

２　安達高校の取り組みの特色

（１）復興教育

東日本大震災後、生活環境（放射線や日本の現状）を分析し、エネルギー・資源、環境問題、国際理解教育を中心にしながら、「持続可能な発展のための教育（ESD）」を展開している。

（２）ユネスコスクール承認とESD推進

復興教育の教育理念を中心に、「ESD」を掲げている。こうした取り組みによって、昨年度12月、本校はユネスコからユネスコスクールとして承認された。福島県内の幼小中高大を通じて初めての承認校となっている。

（３）再生可能エネルギー研究指定校

昨年度より、福島復興事業として福島県教育委員会といわき明星大学で推進している「再生可能エネルギー教育拠点校」に指定を受け、今年度で２年目になる。「復興教育」の中に位置づけ、地球温暖化とエネルギー問題を中心に実施している。また、自然科学部では「地元温泉を利用した温度

差発電」（再生可能エネルギー）を中心テーマにして活発に研究活動をしている。

（４）自然科学部活動　OECD東北スクール

昨年度までの２年間は、研究活動が環境分析である「放射性物質除去と放射線量分析」であった。今年度は「再生可能エネルギー」を扱い、OECD教育局・文部科学省・福島大学が推進している「OECD東北スクール」にも参加している。この活動では、来年８月にパリで開催される復興イベントにおいて、OECD本部を会場にして開催される「再生可能エネルギー」に関する高校生会議で基調報告することになる。

（５）世界ESD高校生フォーラム東北代表校

来年11月に岡山県を会場として、世界33カ国の高校生が集まるESDの世界大会に、東北地区代表として当校から生徒４名が参加する。すでに、一昨年度からこの準備会議等に参加してきており、今後も積極的に関わっていく。また、５カ国ほどの海外生徒との交流を福島県二本松市で行う予定のため、JICA二本松訓練所と連携した教育プログラムを開発する。

３　ESDの枠組み（エネルギー･環境教育）のねらいや教育課程上の位置づけ、活動期間

３．１　エネルギー・環境教育のねらい

・大震災後の様々な困難を、本学習活動によって乗り越えることで、今後、彼らの前に訪れる様々な解のない事象に対しても、最善の結果を導けるような力を養う。

・「危ない」「悲惨な地域」といった「FUKUSHIMA」のイメージを、高校生自らが日本や世界の将来のために考え、行動しようとする前向きな学習活動や学習内容を県内外に発信しながら、将来のために生徒自身が現状を改善していこうとする力を育てる。

・持続可能な将来にするための考え方を学び、エネルギー・環境問題等において、課題発見、課題設定、課題解決する力を育成する。

３．２　教育課程上の位置づけ（活動期間）

（１）１学年・２学年全員は「総合的な学習の時間」で実施する。（１年次～３年次前半）

（２）「世界ESD高校生フォーラム」は、１学年から代表生徒を選出し２年間の活動とする。

（2013年11月～2014年３月）

（３）自然科学部は、研究活動は放課後および休日を中心に、「OECD東北スクール」の活動は放課後および長期休業中に取り組む。

４　具体的な学習・活動内容と授業時間等

４．１　復興教育の概要

（１）実施時期　平成24年６月６日（水）

対象生徒　全校生徒（３学年は希望者）

（２）研究開発課題

生じてしまった現実を、社会の発展を持続不可能にする事象と捉え、「復興教育」の取り組みの支柱に文部科学省「持続可能な開発のための教育（ESD）」を据えながら、持続可能な社会のための教育素材として捉えなおした教材を開発する。

（３）「復興教育」の概説

当校における「復興教育」およびESDでは、現状を把握・認識し、その上で、理想とする福島の復興像や生徒の将来像の前に立ちはだかる様々な課題を見つけ、それを解決していこうとする過程を通じて、力強く生き抜いていくための考え方や姿勢を身につけさせる。

まず、自分たちの置かれている現状を把握・認識するために、放射性物質･放射線への理解を促し、自ら身を守りながら安心して生活できる体制を作る。専門家の講演や新しい知見を導入するなど、不安要因を軽減できるよう創意工夫しながら進める。

次に、福島の復興や持続可能な社会のための理想の将来像を考えさせ、現状とのギャップや妨げている要因を洗い出していきながら、課題解決のための糸口を探すとともに、そのための行動を促していく。さらに、昨年度、ユネスコスクール（ASPnet）加盟の承認を得たことにより、国内外のネットワークを活用しながら、他地域・他国での持続可能な社会づくりを阻む様々な課題や現状への認識を深めることで、ともに困難を乗り越えていく意識を喚起し、互いに課題解決のための行動を進めていく。

（４）実際の取り組み（全36時間、抜粋）

第２回　放射線の学習　平成24年６月13日（水）５校時

福島県が置かれている現状を認識する必要性があることから、「放射線対策教育」を実施した。放射線、放射性物質、放射能の内容から、安達高校での放射線量、リスクの相対評価、これから高校生ができることとその影響力などについて考えた。

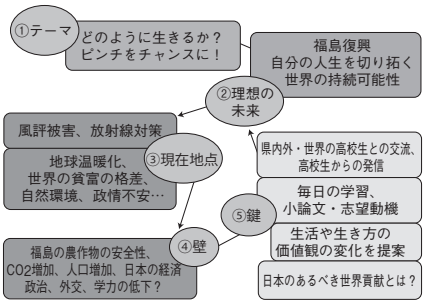
第５回　再生可能エネルギー講演会　平成24年10月10日（水）５、６校時

いわき明星大学の先生から、地球温暖化が進んでいる現状とその原因についてご説明をいただき、こうした状況を改善するための１つとして、再生可能エネルギーの必要性についてくわしくお話しいただいた。地球規模での持続可能性を問う大きな問題であり、その中での再生可能エネルギー開発状況はとても厳しい状態であることを認識した。

第９回　「情報」の時間を使ってのグループ学習　12月～２月　１学年全クラス

これまでの学習を踏まえて、グループ学習・発表を行った。将来あるべき未来、持続可能な社会にするために、現状をいかにすべきかを考えた。現状を認識し理想とする未来とのギャップで何が課題なのか、課題を見つけ、その課題を解決するためにどのような考えや行動をとるべきかを議論しながら進めた。

グループ発表の作り方



第10回　総合的な学習の時間発表会　平成25年２月20日（水）

１年間の学習のまとめとして、「情報」の時間でのグループ学習によって作成されたスライドを使って発表会を実施した。各クラスで事前にクラス内発表をして代表グループを選出し、学年全体で生徒が考えたテーマや課題解決の仕方などを全員で共有した。

４．２　自然科学部

（１）東京研修（校外研修）

毎年、夏休みに関東近郊の企業・大学・研究機関を訪問し、自分たちの研究内容を深めるための研修を行っている。

・東京理科大学川村康文研究室

色素増感型太陽電池と風力発電の実験を体験させていただいた。放射線に関する現状把握の次に、再生可能エネルギー研究を進めていこうとしている自然科学部にとって、非常に参考になる経験だっ

た。困難は多いものの再生可能エネルギーの可能性を目の当たりにできた。

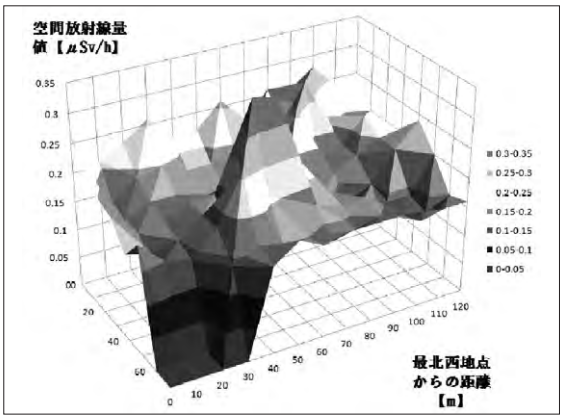
・埼玉大学

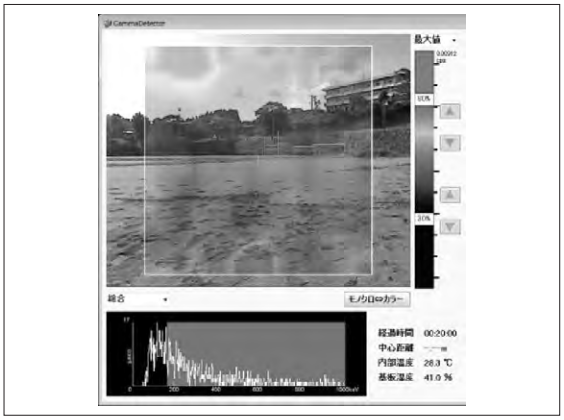
放射線の分析に関して、物化生地の専門の先生方からご指導をいただいた。埼玉大学の分析機器や学習環境の良さに、生徒たちが驚いていた。進路選択への意識が変わったことと、安達高校における生活環境、自然環境を改善するために、自分たちの分析方法や手法を見直す良いきっかけになった。

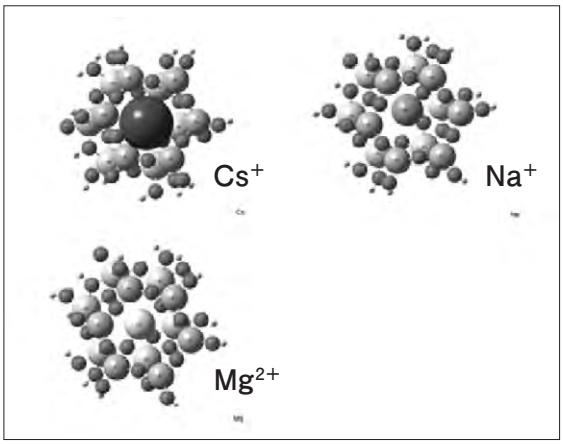
（2）日々の研究活動

放射線および再生可能エネルギーの研究を活発に行っている。（図は昨年度までの研究）

校庭の空間放射線量値（2m）







粘土鉱物面への陽イオンの吸着構造
（東邦大学理学部山岸喆彦教授HPより作成）

（3）OECD東北スクール

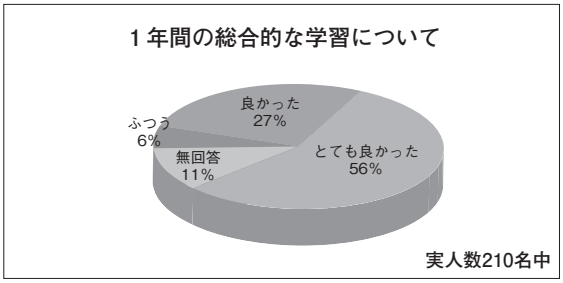
OECD教育局、文部科学省、福島大学で推進している教育改革を狙った事業である。被災３県より約100名の中高生が集まり、2014年８月にフランスパリで開く復興イベントに向けて、様々な手法を用いて学習効果を検証する教育プログラムに、安達高校から12名が参加している。今年５月にパリを視察した生徒は、パリでは福島＝原発事故＝住めない場所であり、福島に住んでいる我々の感覚と全く違うと言ってもいい見方をしていることを知った。そこで、イベントに際しては、科学的な知見に基づいて生活環境を判断し生活していること、さらに、困難を乗り越えるべく再生可能エネルギーを研究するなど未来を向いて努力している様子を表現したいと考えている。

全体会の様子
ユニクロ・フランス社長　真田秀信氏の講義

５　学習、活動を通じての子どもたちの反応、変化

これまでの生徒の取り組みや様子は、どの授業も真剣な生徒が多かった。特に、グループ活動で、

６クラスのすべてのクラスにおいて、自分たちで真剣に考え議論している様子が見られた。「総合的な学習の時間」発表会後のアンケートによると、１年間学習してきて良かった、とても良かったというのが83％という結果となった。



～生徒の感想～

○福島復興のために、私たちにできることはほんのちょっとの小さなことだけど、私たちがやらなければ誰がやるのか分からないと思った。私たちが互いに支え、互いに守って幸せな福島にしたい。これからの行動を考えていきたい。(男子)

○これから福島、日本を変えていくのは自分たちなんだということを改めて強く感じた。これから、人に想いを伝える力を身につけたいと思った。(男子)

○自分で何ができるのかを考え、実行する力をつけたい。もっと前に進まなくてはいけないと思った。また、もっと知らないことや知らなくてはいけないことを学んでいきたい。(女子)

○国際ワークショップなどの活動に積極的にチャレンジして、いろいろな方と交流する力を身につけたいと思いました。(女子)

６　今後の課題とこれからの学習・活動計画や方向性

（１）今後の課題

①　試行錯誤を続けている現在までの取り組み「復興教育」の一層の充実を図る。「創造的復興教育」としての位置づけを明確にし、俯瞰的に教育内容を整理し系統性を重視しながら最大限の効果が得られるものにする。

②　組織体制の充実を図る。

③　「創造的復興教育」から内容を発展させ、ESDおよび外部機関連携による学習活動によって、通常の学習活動を充実させる。

（２）これからの学習･活動計画や方向性「復興教育」

①　１年生全員231名

・再生可能エネルギー講演会、JICA二本松との連携による国際理解教育を実施する。

・グループ学習で様々な分野における持続可能な社会について調査、議論、発表活動を行う。

②　２年生全員214名

・学習内容を表現するために、小論文やプレゼンテーションでの表現力を身につける。

・JICA二本松と連携し、世界的な視点での学習を恒常的に行う体制を固める。

③　ESD高校生世界フォーラムへの生徒参加

・2014年11月、東北地区代表として参加する生徒４名が、世界の高校生と交流しながら、福島のエネルギーや現状等を発信する。

再生可能エネルギー学習月別指導計画書

月	内容
７月	○自然科学部研究活動 ・東北大学学生、院生をメンターとして『温度差発電』について研究 ・「東京研修」29日(月)～31日(水)東京方面での研修 29日(月)サイエンスパーク株式会社(神奈川県) 30日(火)慶応義塾大学武藤佳恭研究室訪問(神奈川県) 31日(水)東京大学大学生大学院生との交流研修(東京都文京区)
８月	○自然科学部研究活動 ・『温度差発電』その電力を用いた「アプリケーション」を研究 ・第４回OECD東北スクール参加３日(土)～７日(水) 2014年８月に実施するイベント案を検討 ・googleサイエンスフェア(仙台市)での発表
９月	○自然特学部研究活動 ・ヤマト教材社の方をお呼びしての実験機器の学習 ・論文作成、野口英世賞応募 ○「復興教育」 ・JICA担当者との打ち合わせ ・公開文化祭での発表、展示
10月	○自然斜学部研究活動 ・日本学生科学賞応募 ○「復興教育」 ・JICAでの教員研修(６～８名)参加予定
11月	○自然科学部 ・再生可能エネルギー教育成果発表会での発表 ・高文連県大会で発表 ○「復興教育」 ・エネルギーに関しての表現力育成研修
12月	○「復興教育」 ・エネルギーに関しての表現力育成研修 ・講演会 ○自然斜学部 ・JST中高生の科学部活動振興プログラム連絡協議会生徒発表(仙台市) ・OECD東北スクールでの研修
１月	○「復興教育」 ・エネルギーに関しての外部講師による研修 ・エネルギーに関しての表現力育成研修
２月	○「復興教育」 ・エネルギーに関しての表現力育成研修
３月	○１年間のまとめと整理 ○次年度の活動計画作成

ユネスコスクール最優秀賞

愛知県知多郡東浦町立緒川小学校
教諭　種村　修一

豊かな関わりの中で自立した個を育む学校の創造
～持続可能な明日をつくる教育課程の実践～

１　はじめに

本校は、1978年にオープン・スペースをもつ学校（オープン・スクール）として生まれ変わって以来、個別化・個性化教育を推進してきた。36年目を迎えた本年度は、ＥＳＤの視点を取り入れた新たな研究主題を掲げて、実践を進めている。

２　ねらい

本校では、「学び合う話し合い」を柱とする集団学習と「自己学習力の育成」を図る個別学習に取り組むことで、「自立した個」を育むことを目指している。さらに、2011年11月にユネスコスクールの認定を受け、総合学習「生きる」を中心に進めてきたＥＳＤの実践を、教育課程全体に広げることを目指している。実践のキーワードは「自分事としての学び」と「未来を創る学び」である。

３　実践内容

(1) 年間指導計画の作成

本校では、生活科と総合的な学習の時間を一体的な構造のものと捉え、総合学習「生きる」として編成している。そして、６年間で環境・人間・国際の３領域とのかかわりを通して、子どもたちに自分自身のよりよい生き方を探究させてきた。

総合学習「生きる」の活動の方向性とキーワード

※自分の所属する学年を「くに」と称している。

学年	活動の方向性	キーワード
1	四季の行事を踏まえた活動をする。	くにの一年
2	自分自身を踏まえて、地域の自然や人々に触れる活動をする。	探検
3	地域に根ざした方々から学ぶ活動をする。	交流
4	身の回りの社会生活など、くらしに関わる活動をする。	くらし
5	動植物、人間の生命に関わる活動をする。	いのち
6	様々な人の生き方から学ぶ活動をする。	生き方

平成23年度、それまでの総合学習「生きる」の各活動を「自然とのつながり」「社会とのつながり」「人とのつながり」の３つに整理し、教科等の学習内容との関連を整理した「ＥＳＤカレンダー」を作成した。そして、毎年更新を重ねている。また、本年度は、ＥＳＤの視点を取り入れた評価規準「ＥＳＤに基づいた学習計画」を作成した。

(2) 豊かな体験活動

総合学習「生きる」が、子どもたちにとって探究的な学びになることを目指している。年度当初に単元構想の練り直しや、教科学習との関連の見直しを行い、ＥＳＤカレンダーを更新している。そして、実践では体験活動を取り入れ、子どもたちの計画、活動の振り返りと発表を通した学び合いを大切にしている。

①ゲストティーチャーの活用

本物を知り、体験する学習を大切にしている。そのため、学年、学習内容に応じて、様々なゲストティーチャーを招いている。ゲストティーチャーとは事前に打ち合わせを行い、学習のねらいを共有している。実践後はゲストティーチャーの連絡先や学習内容を記録し、一覧にして次年度へ引き継いでいる。

１年 樹木医による授業

６年 青年海外協力隊員による授業

②地域とのつながりを知る「町たんけん」や、老人会の方々との交流

２年生が、自分が町の一員であることに気付き、

地域を大切にする気持ちを高めることを目標に、「町たんけん」に出かけた。本年度は校歌の歌詞に出てくる自然や風景をきっかけに、地域のどこを探検し、調べたいかを考えさせた。２回行い、１回目は調査活動で，２回目はインタビューである。毎年、地域の方が子どもたちの訪問を受け入れ、学習を支えてくださっている。

３年生は、地元の老人会の方と交流を行って、昔の遊びやくらしについて教えてもらい、体験をさせてもらっている。戦争の時代の話を聞くことで、国語「ちいちゃんのかげおくり」の学習につなげることができた。

２年 町たんけん

３年 昔のくらし体験

③校地内の樹木の観察、緑のカーテンや米作りを通した環境学習

１年生は、校地内にある樹木を「マイツリー」として一人一本選び、年間を通じて観察している。樹木による葉の形や大きさの違いに気付いたり、季節による変化を感じたりしながら、自然とのつながりを意識した活動をしている。

４年生は、緑のカーテンの栽培活動を通して、地球温暖化について考えた。栽培した場所によって生長に違いがあったことに目を向け、原因を探る活動も行った。また、校内で環境について点検活動を行い、それをもとに校内で自分にできるエコ活動を考え実践した。水やりに使う雨水を溜める子、野鳥を呼び戻すために巣箱を置いた子、節電を呼びかけるためにポスターを書いたり、校内放送で呼びかけたりした子、様々であった。

５年生は、校地内にある水田で米作りを行った。例年地元の老人会の方の支援を得ながら行っている。活動をより自分事にするため、二年前から水田と並行して、一人一鉢のバケツ稲にも取り組んでいる。本年度は、「茶碗一杯にお米は何粒あるか」という問いかけからスタートし、実際に子どもたちが米粒を数えるところから学習をスタートした。また、田植えや稲刈り等の活動だけでなく、水田の水の管理や観察を、毎日当番を決めて行った。今年の水田は豊作であったが、バケツ稲の収穫を終えたときに、子どもたちの中から「思ったより少なかった」という感想があった。水田と身近に置いて育てたバケツとを比較しながら、農家の方の苦労を知ったり、命を育て、いただくことの意味を考えたりすることができた。

４年 緑のカーテンの栽培

５年 田植え

④アートマイルプロジェクトを通した、国際理解学習

昨年度から６年生がアートマイルプロジェクトに参加している。本年度は、オーストラリアのヴィクトリア州のトラワラ小学校と交流している。インターネット電話サービスを使っての交流では、最初は「不思議な感じがした」と述べていた子が、「自分たちのことをもっと伝えたい」「相手のことをもっと知りたい」という思いをもつようになった。「つながっている」という実感のある学習にすることができた。交流の最終的な成果として、壁画を共同制作する。子どもたちは、一人ひとり自分の宝や、伝えたい日本の文化を絵で表した。

６年 国際交流・アートマイルプロジェクト

⑤ホワイトボードを活用した、学び合う姿勢を高める話し合い活動

話し合いの土台づくりとして、小グループで行っている。その際、校内で以下の４つについて共通理解を図り、取り組んでいる。

・話し手は、必ず自分の考えの根拠・理由を付け加えて話す。
・付箋やホワイトボードなどを使って、個人の意

見が見えるようにする。

・「つなぎ言葉」「お助け言葉」を使って、話し合いになかなか入れない友達をうまく引き込む。

・リーダーは、異なる意見も受け止めながら、方向を一つにまとめるように努める。

答えや考え方が一つではないテーマで話し合うことや、すぐに多数決を取らないことで、「個」が見える学び合う話し合いを目指している。

1年 総合学習「生きる」

6年 国語

⑥全校集会「朝のつどい」でＥＳＤについて理解を深める学習

全校児童が集う場で、校長が地球環境をテーマにＥＳＤについて概要を話したり、研究主任がクイズ形式でユネスコスクールに関わる問題を出したりして、理解を深めた。

「朝のつどい」ＥＳＤ・ユネスコスクールについて

⑦学習活動の様子や成果を「おがわっ子フェスティバル」で発表

総合学習「生きる」や各教科で学習してきた内容のまとめの時間である。発表することで、子どもたちの自信につながっている。

1年 詩の群読

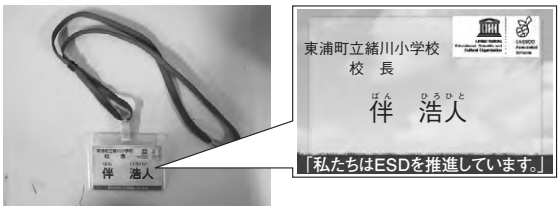
4年 エコキャップアート

(3) 教師の学び合い

ＥＳＤの推進役であるユネスコスクールの認定を受けていることを自覚すると共に、ＥＳＤの実践を共有し、学び合いを大切にしている。

①「ＥＳＤ推進」の名札を着用し、実践を意識化

「ＥＳＤとは何かを全員が語れる必要がある」そんな思いから、職員用の名札を作成した。また、子どもたちも日頃から目にするため、「ＥＳＤとは」という疑問をもたせることもねらいの一つである。



②教科や道徳をＥＳＤの視点で見直した校内授業研究の実施

各学年で研究授業を行った。総合学習「生きる」だけでなく、教科や道徳をＥＳＤの視点で見直した実践も行った。指導案にはＥＳＤの視点を明記し、身に付けさせたい能力や態度を評価項目に加えた。参観後は研究協議会を開き、課題を共有したり、手だてを話し合ったりした。

校内研究授業

ワークショップ型研究協議

③ＥＳＤの実践を職員室内の掲示板で報告し合う「今週のＥＳＤ」

本校では、毎週金曜日の朝に、「プランニング・タイム」と呼ばれる時間がある。これは、教師が配布した「プランニング」（週予定のようなもの）をもとに、次週の学習の予定を確認する時間である。子どもたちに、学習の見通しをもたせるために行っている。本年度、その「プランニング」を職員室内に掲示し、「今週のＥＳＤ」というコーナーをつくった。そして、担任がＥＳＤと関連のある学習であると判断した場合に、シールを貼ってもらうようにした。「これもＥＳＤかもしれない」という教師の気付きを大切にするためである。年度当初、ＥＳＤカレンダーを見直したときには気付かなかった教科との関連を見つけたり、他クラスが

どんなＥＳＤの実践をしているかを知ったりすることができる場所となっている。

ＥＳＤの実践は緑のシール。ホワイトボードを使った実践は黄色のシールを貼る。

今週のＥＳＤ

④ＥＳＤの実践や子どもの姿を紹介する職員向け通信の発行

他校の実践やＥＳＤについて学んだことを職員で共有するために、「研究推進通信」を発行している。号数を重ねていくうちに、校内でのいろいろな学年の実践や、子どもたちの様子を伝える場にもなってきた。職員向けの通信であるが、ホームページでも公開し、学校の取り組みを発信する機会にもなっている。

タイトルには、集団学習と個別学習を車の両輪と捉え、バランスよく両方に取り組み、しっかりと足跡を残していきたいという願いが込められている。

研究推進通信「轍」

⑤各学年の活動を紹介する校内の掲示板の写真に、ＥＳＤの視点を明記

校内に、各学年の総合学習「生きる」の活動の様子が写真で紹介してある。そこに、「人とのつながり」等、ＥＳＤに関連するキーワードを示すようにしている。そうすることで、子どもたちが、学習している内容とＥＳＤがどのような視点で結び付いているのかを視覚的に捉えることができる。

「生きる」×ＥＳＤ掲示板

また、他学年がどの時期にどんな活動をしているのかを、お互いに知ることができる。

(4) 保護者や地域への発信

ＥＳＤの実践は学校だけでなく、家庭や地域へつなげ広げていくことが大切である。

①フェスティバルで子どもたちの姿を通してＥＳＤを発信

総合学習「生きる」で、調べたことや考えたことを伝えたり、体験してもらったりするコーナーを各学年でつくった。

２年「町たんけん」の発表

４年 エコクイズ

②ＰＴＡ総会や学年懇談会でＥＳＤの説明や資料の配布

保護者が学校へ集まる機会は、ＥＳＤやユネスコスクールについて理解を深めてもらうよい機会であると捉えている。

ＰＴＡ総会　学校長あいさつ（ＥＳＤについて）

③保護者向けの学習会（教育講座）の開催

例年行われている教育講座で、本年度はＥＳＤやユネスコスクールについて理解を深めていただく内容を盛り込んだ。

教育講座　「もっと知りたい緒川小の教育」

④ホームページと学校便りで、ＥＳＤの実践や子どもたちの活動を紹介

ブログ形式のホームページで、子どもたちの姿を

毎日更新している。ＥＳＤに関わる内容も紹介し、子どもたちの姿を通して、ＥＳＤが広がり、つながるように発信している。また、ＥＳＤカレンダーも公開している。

緒川小学校ホームページ

４　まとめ

豊かな体験活動を通して、子どもたちの主体的に学ぶ姿や、よりよい考え方を導き出そうとする姿が見られるようになった。そうした力を、一つの学習場面だけでなく、つなげ広げていくことが今後の課題である。

１年生が取り組む「気になる大すきマイツリーイヤーズ」で、台風の翌日、校庭にあるアカシアの木が強風により倒れかかっていたことがある。マイツリーにアカシアを選んでいた子は、それを知ると涙を流して悲しんだ。その後アカシアは専門家が剪定を行い、見事によみがえった。子どもたちはアカシアの前で「ばんざーい」と喜んだ。冬の寒い朝、マイツリーに自分の上着を脱いで着せている子がいた。話しかけたり、手紙を読んだりしている子もいた。マイツリーを通して、子どもたちの心温まる姿をたくさん見ることができた。この１年生の子たちが、今後ＥＳＤの学習を通して、どんな６年生に育っていくのか。そして、どんな大人に成長していくのかとても楽しみである。

１年 マイツリーの前で

本年度作成した、「ＥＳＤに基づいた学習計画」（評価規準）は子どもの変容をもとに、検証が必要である。ＥＳＤカレンダー同様、議論を重ねながらよりよいものにしていきたい。

今後も教師の学び合いにより、ＥＳＤを推進していきたい。

平成25年度　第２学年　ＥＳＤに基づいた学習計画　　東浦町立緒川小学校

単元名（時間）	お川のまちをたんけんしよう（45時間）
ＥＳＤの視点	多面的，総合的に考える力・コミュニケーションを行う力・他者と協力する態度・つながりを尊重する態度・進んで参加する態度
ねらい	○自分が住んでいる緒川の町について詳しく知り，自分自身が町の一員であることに気付き、地域を大切にしたいという気持ちを高める。

次	時間	学習活動	ＥＳＤの構成概念	活動内容［ＥＳＤで重視する能力・態度］	【評価の観点】評価規準
1	5	学習計画を立てよう		・校歌の歌詞をきっかけに，地域でどこを探検し調べたいか考える。	【関心・意欲】・学習の見通しをもち、意欲的に取り組もうとする。
2	13	緒川の町を探検しよう Ⅰ		・自分が住んでいない地域を探検するコースを探検する。・調べたことや気付いたことを報告書にまとめる。	【思考・判断】・探検で知ったことを分かりやすくまとめる。
3	2	緒川の町探検の発表会をしよう Ⅰ	相互性（互いに関わり合っていることを知る）①	・発表会で他の児童の報告を聞く・町の一員として，地域の人々とのつながりを大切にしようとする。（「つながりを尊重する態度」②）	【思考・判断】・地域について比べたりつなげたりして、自分の感想をもつ。
4	18	緒川の町を探検しよう Ⅱ	責任性（インタビューをして，責任をもって結果をまとめる）③	・地域をさらに詳しく調べるための計画を立てる。（「未来像を予測して計画を立てる力」④）・小グループで探検場所を訪問しインタビューをして，報告書にまとめる。（他者と協力する態度⑤コミュニケーションを行う力）⑥	【実践的態度】・相手から学ぼうとする。【思考・判断】・探検で知ったことを分かりやすくまとめる。
5	12	緒川の町探検の発表会をしよう Ⅱ		・発表会で他の児童の報告を聞く・町の一員として，地域の人々とのつながりを大切にしようとする。（「つながりを尊重する態度」②）	【実践的態度】・相手から学ぼうとする。【思考・判断】・探検で知ったことを分かりやすくまとめる。
6	4	探検のまとめをしよう		・探検で分かったことをパネルにまとめる。・緒川の町のよさについて考える。（「つながりを尊重する態度」②）	【思考・判断】・探検で知ったことを分かりやすくまとめる。・探検活動を通じて、自分の感想をもつ。

【ＥＳＤの視点表による分析】

持続可能な社会づくりの構成概念							ＥＳＤの視点に立った学習指導で重視する能力・態度						
Ⅰ 多様性	Ⅱ 相互性	Ⅲ 有限性	Ⅳ 公平性	Ⅴ 連携性	Ⅵ 責任性	Ⅶ その他	❶批判的に考える力	❷未来像を予測して計画する力	❸多面的・総合的に考える力	❹コミュニケーションを行う力	❺他者と協力する態度	❻つながりを尊重する態度	❼進んで参加する態度	❽その他
【多様】	【相互】①	【有限】	【公平】	【連携】	【責任】③	【他】	【批判】	【未来】④	【多面】	【伝達】⑥	【協力】⑤	【関連】②	【参加】	【他】

ＥＳＤに基づいた学習計画

小　学　校　賞

多摩市立多摩第一小学校
校長　棚橋　　乾

（1）　本校のとらえるESD

ESDとは、持続可能な社会づくりのため、環境問題や人権問題、経済問題など、複雑に絡んだ現代社会の様々な問題に主体的に取り組む人材を育てる教育である。そのためには子ども達の視野を広げ、自ら考え、発言し行動する能力と態度を育てる必要がある。ESDの視点に立った学習指導の目標は『教科等の学習活動を進める中で、「持続可能な社会づくりに関わる課題を見い出し、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付ける」ことを通して、持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養う。』とされている。本校では、持続可能な開発のための教育（ESD）とは、OECDがグローバル時代を生きる力を定義した【キー・コンピテンシー】や国立教育政策研究所の示す【ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度】の例示にあるような能力を参考にして、子ども達が未来に向けた学力を身に付ける教育であると考えた。

（2）　本校のとらえる問題解決力

PISA型学力観では、「知識や経験をもとに、将来の生活に関する課題を積極的に考え、知識や技能を活用する能力」を求めている。これは学習指導要領で示している生きる力の目指す「確かな学力」とほぼ同じと考えられる。また、学習指導要領で示している課題を解決するために必要な力（思考力・判断力・表現力）は、ESDで育む力（学力）と同義と位置付けられる。

本校では問題解決力を①批判的に考える力②未来を予測して計画を立てる力③多面的・総合的に考える力（思考力・判断力・表現力）ととらえる。実際の授業では、問題解決型の“思考と体験の繰り返しを重視した学習”を中心として、児童の問題解決力を育てる。問題解決学習には児童自ら考え工夫する場がたくさんある。問題解決に向けての工夫の積み重ねを通し、子ども達の思考力や判断力を育てていくこととする。また、学んだことの発信に対し、受信側からの共感や異なる考えを得る機会もあるであろう。それらは多面的に物事を見ることにつながり、自己の考えを深めることになると考える。

（3）多摩市では

多摩市は2050年の大人づくりをキャッチフレーズとして、多摩市全体で持続可能な開発のための教育（ESD）に取り組み、全小中学校がユネスコスクールとなっている。多摩市のESDでは「人とのつながり」「自然とのつながり」「社会とのつながり」という３つのつながりが重要であるとされ、「体験」「思考・対話」「行動」の３つのアプローチ方法を重視している。そのため地域の環境問題や社会的な課題をテーマとした体験型の学習の推進や、子ども達が自ら考え、地域を含む多様な方々との対話に積極的に取り組んでいる。そして持続可能な社会づくりに向け、学んだことを実践していく力を育むことを大切にしている。このように多摩市の取り組みとしても、持続可能な社会づくりに向けた問題解決力の育成が求められている。

（4）本校の研究経過

本校は、23年度から、児童の問題解決力を育てることをテーマに、研究を進めてきた。23年度は、問題解決の力を生活科や理科の側面から育てていくこととし、問題解決のプロセスを大切にしながら研究を進めてきた。その結果、児童の関心意欲を引き出すための事象提示や発問の工夫等で、児童が主体的に学習に取り組む姿が見られるようになってきた。また、研究を通して問題解決のプロセスが児童に定着するようになり、見通しをもって学習に取り組む姿も見られるようになってきた。さらに、教材キットに頼らない実験材料の活用や

実験方法の工夫は、児童が自分の力で工夫して問題を解決しようとする姿につながってきた。しかし、教科学習での問題解決力の育成は、どうしても授業時間が大幅に増えてしまうことや、教科のねらいがあるため、課題設定を児童自らでは十分にできないなどの課題も見えてきた。

そして24年度は、児童の主体性をより尊重しやすい生活科や総合的な学習の時間での取り組みを通して、子ども達の問題解決力を育てていくこととした。“自分から取り組んでいく力や失敗しても乗り越える力”や“自分の考えをもち、自分の意思で行動できる力”“相手への思いやりをもち、進んで関わる力”等を身に付けてほしいという願いから、「自立できる子を育てる」ことを目標に、研究を進めた。

研究を進める上では、子ども達の主体性を尊重し、それぞれの発見、気付きを大切にするとともに、見る、触る、聞くなど様々な感覚を大切にした体験や、人との出会いや関わりから学ぶ力なども重視した。また多摩川をはじめ、本校周辺の自然環境を生かした豊かな体験を伴う学習を大切にしてきた。さらに総合的な学習の年間指導計画を大きく見直し、発達段階に応じて子ども達に確実に問題解決力を付けられるよう、学習内容を整理した。しかし根本となる“問題解決力のとらえ方”についてや“発達段階における付けたい力”の共通理解が十分でなく、研究の方向性があいまいになる面があった。また評価方法が定まっておらず、児童にどのような力が育ったかを明確にすることができなかった。

引き続き、自立できる子どもの育成に向け、問題解決力を育てる指導法を工夫していくが、今年度は、21世紀を生きる子ども達にどんな力を付けたらいいのかというESDの視点から、児童の問題解決力を育成することとした。昨年度の反省を生かし、今年度は問題解決力をどうとらえるかなど、目指す方向をはっきりさせた上で、研究を進めた。また、今年度は評価方法についての研究も重ね、研究の成果がどのようなものであるのか客観的に測りたい。

（5）主題にせまるための授業づくりの視点

①身近な自然や地域を活用した体験学習と問題解決のプロセスの重視

児童の問題意識はどのようなときに生まれるのだろうか。発達段階において、児童は具体的な体験や事物との関わりを通して、実感を伴った理解をする。本校は敷地内に緑が多く、近隣には多摩川が流れているなど自然環境に恵まれている。また学区域には商業施設が充実している一方、室町時代の古戦場跡など多くの文化財が残る歴史のある地区でもある。様々な体験が可能な環境が身近にあるということの良さは、児童の興味関心に沿い、すぐに、何度でも、体験や観察、確認等ができるということでもある。しかし、これだけ恵まれた環境の中にありながらも、本校の児童は直接体験が不足しているのが現状であり、体験の機会を意図的に取り入れていくことは極めて重要である。身近な自然や人も含めた環境を活用した体験を行い、問題解決学習の流れに沿った学びによって、思考と体験を繰り返す学習プロセスを重視した授業を行う。

②子どもの意欲を高めるような発問・指導方法の工夫

児童が主体的に問題解決に取り組むには、児童の意欲を高めるような体験など豊かな体験の場を用意すると同時に、「しかけ」が必要である。例えば問題提示の段階では、不思議さや驚きを感じさせる場面、矛盾を感じさせる場面、児童の既成概念を揺さぶる場面などを意図的に用意する。そのためには教材や資料、発問等の工夫が必要である。また、主体的に問題解決するプロセスとは、全てを児童に丸投げするということではない。児童の学びをより意欲的で深いものにするためには、適宜教師や専門家による指導も必要である。どの段階で何を指導し、何を児童に任せるか。どのタイミングでどのような支援が有効なのか。学習内容や児童の実態に合わせた教師の関わりのあり方を吟味し、発問・指導方法を工夫することで児童の意欲を高める。

③問題解決の過程を意識した授業の実践

児童の問題解決力を育むためには、学習過程に

おいて問題解決のプロセスを意識した授業を展開することが重要である。【多摩一型問題解決学習の流れ】に沿った学習過程において、「問題把握」「体験」「課題設定」「仮説」「計画・立案」「検証」「結果・結論」「発信・実践」をする活動を児童が６年間を通して繰り返し経験することで、問題解決力が身に付いていくと考える。

本校では、児童の豊かな体験を通して得た感動や驚きから、「なぜ、どうして」という問題意識をもつことをきっかけに、問題解決学習に取り組むことができると考える。

④発信の重視

発信を意識して活動することは、児童の意欲を高めるのに有効であるだけでなく、様々な効果がある。まずは、発信する相手や目的に合わせ、分かりやすく効果的な伝え方を工夫することで、自分の考えがより整理される。また、他者との情報交換は、「相手のところではどうなのだろう。」と、自分達の調査活動を他との比較で考えるきっかけになり、共通点や相違点に目を向け、自分達だけで活動する場合よりも学びが深まる。さらに発信相手の反応（共感、反論、多様な考えの提示など）を通し、自分達だけでは得られなかった新しい発見をするなど、物の見方を広げる機会にもなる。発達段階に合わせ、友達、保護者、他学年や地域、国内・海外の学校など様々な相手への発信を通して、他者とつながり学び合う機会を設けていく。

⑤評価の工夫

問題解決力は、数字や記号による評価が難しい。しかし、評価方法を工夫することで、児童の変容は把握できる。その一例がイメージマップの活用である。４年生の多摩川の学習の場合、学習の最初と最後で、児童が多摩川をキーワードにイメージマップを作成し、その言葉の量や言葉のつながりの複雑さを比較するのである。ポートフォリオやワークシート、行動記録、特に低学年では、絵や作品などからも児童の変容は把握できると考える。それらの変容から児童にどのような力が付いたのかを判断するためには、児童の作品や発言、行動記録をどう見取り、どう評価していくかを明らかにしていく必要がある。学年に応じた評価の見取り方を明確にすることで児童の実態をつかみ、一人ひとりの児童の良さや可能性を伸ばすことに生かす。また、評価をもとに、本校の問題解決力育成のための指導方法は本当に有効なのか検証し、授業改善に生かす。

（６）活動の概要

学年ごとに異なる取り組みを指導する。学校全体の指導計画によって、発達の段階に応じた指導によって連続する学びになるよう計画することが大切である。また、年度末に全校発表会を実施することで、発信方法を工夫させ表現力を高めさせるとともに、次年度へ子供に見通しをもたせた。

第１学年　あそんでふれて、しぜんはっけん

生活科で自然体験遊びやネイチャーゲームによって、自然と関わらせ、豊富な自然体験によって、身近な自然環境への関心をもたせた。草笛、ササ舟といった昔遊びに加えて、ビンゴゲーム形式の自然発見ゲームや虫めがねを使って草むらの根元を探検するなど、多様な体験をさせた。また、河原の自然物を使った遊びを考えて発表し、全員で遊ぶこともした。サツマイモの栽培を通して、土づくりを行い、植物の生育を見守る体験も行った。

第２学年　わくわく自然体験

生活科の時間にネイチャーゲームによる豊かな自然体験とともに、多摩川探検を通して身近な地域学習への関心を高める。浅瀬のガサガサ体験でハヤやカワエビなどの小動物を採集したり、野草の押花を楽しんだりする。川の水に浮んで流れる

体験もする。

子どもの感想：川の水は冷たかったけれど、こんなにたくさん生き物がいると思わなかった。川エビ、ドジョウやカメもいた。はじめて川に入って楽しかった。

第３学年　地域の達人になろう

総合的な学習の時間に、地域の自然、商店、公共施設、農業の見学や調査を行い、地図上にまとめて発表を行う。農家や商店を訪ねてインタビューによる調査方法を体験したり、デジカメを使った記録方法や、ポスターセッションによる発表を行うことで、調査方法や発表方法の基礎を学ぶ。また、和太鼓を打つ体験や、地域に伝わるお囃子を実際に踊る体験することを通して地域理解を深め、「地域の達人」をめざす。

第４学年　めざせ多摩川博士

総合的な学習の時間に、多摩川をテーマに調査を行った。

まず、多摩川の調べ方を外部講師に教えてもらうために、多摩川と河原の植物、魚、石、野鳥、ゴミ、水質のテーマごとに話を聞き、水質調査などの体験活動を行った。

次に、テーマごとのグループをつくり、調査結果の予想、調査方法を話し合い、計画書にまとめた上で、実地調査を行い、結果をまとめた。さらに、学年内で発表会の後に、インターネットのテレビ会議を活用して、上・中・下流の学校で、学んだことや多摩川の様子などを発表し合い、交流した。最後に活動をふり返り、活動の良かった所や改善点を出し合った。

子どもの感想：身近な川の様子がよくわかった。生き物が多かったけれど、意外とゴミが多かった。調べたことを、発表方法を工夫して発信するのが楽しかった。

第５学年　みつめよう私たちの生活と環境

総合的な学習の時間に、地域の農家の方に指導していただき校内の田んぼでの稲作体験をする。田植えから除草、稲刈り、脱穀などを手作業で行い、米を作る楽しさとともに作業の体験する。収穫した米は、６カ国の留学生から世界の米料理を教えてもらい、食を通して国際理解を図り、６年生の学習につなげる。また、米や稲作をキーワードに他校に発信した。発信は４年生の経験を生かし、子どもが内容を工夫する。特に、ユネスコスクールの連絡網を活用して東南アジアの小学校と交流する計画である。

第６学年　エネルギーを通して世界を知ろう

理科の電気や発電の学習をきっかけに、総合的な学習の時間に、エネルギーについて学ぶ。様々な発電方法を調べて発表し、実際に生活や社会を支えている発電について関心をもつ。次に、風力発電機を自作することで、発電の大変さや大規模な施設が必要なことを理解し、生活の中で節電することの大切さを知る。さらに、自然エネルギーを身近に感じさせ、日本や世界のエネルギー問題の未来を考えた。

子どもの感想：風力発電用にペットボトルの羽根の形を工夫した。これからもエネルギー問題に関心をもちたい。

中　学　校　賞

新潟大学教育学部附属長岡校園
中学校 教諭　神子　尚彦

はじめに

当校園がある長岡市は、新潟県のほぼ中央に位置し、日本一の大河、信濃川が中央に流れる海と山に囲まれた自然豊かな場所であり、また、新潟県内第二の都市で交通網が整備された多種多様の産業が集まる地域である。さらに、周辺の市町村と合併し、11地域の歴史や伝統芸能、特産物など、様々な特色をもった市になった。

そんな長岡市に位置する当校園は、文部科学省の研究開発の指定を受け、平成22年度に新設教科「社会創造科」を設置した。Think globally, Act locallyの考えの下、当校園の研究主題である「社会的な知性」を培うために、持続可能な社会を構築する資質・能力をもつ子どものはぐくみを目指している。

そこで、本稿では、社会創造科のカリキュラムや単元の開発といった「教科の枠組み」と「実践」についてまとめたい。

Ⅰ　「社会創造科」の枠組み

１　社会創造科の設置の目的

環境保全、経済資源、エネルギー、貧困、人権、紛争等、世界は様々な価値観の相違にもとづく問題を多く抱えている。また、ボーダレス化、グローバル化が加速し、私たちの社会全体に大きな影響をもたらしている。さらに、日本国内では、戦後の日本が作りあげた政治・社会のシステムが景気低迷、産業構造の変化、地域コミュニティの変化、災害の影響等により大きく変容してきている。

このような現状を打破、持続可能な社会に創り変えるには、ある個人の力によるものではなく、専門的な知識や技能を有する人と人とが手を携え、尊重し合い、互いにもつ知識や経験といった「知」を生かしながら新たな発想のもと、問題を解決していくことが重要であると考えた。

そこで、持続可能な社会を創りあげる力をはぐくみ、持続可能な社会の実現を目指す人材を育てるための教科が必要と考え、「社会創造科」を新設した。

２　「社会創造科」の目標

現実にある地域の問題を自分のこととして捉え、様々な立場の人と手を携えながらその解決を志向する活動を通して、「自己を推進すること」、「相互に交流すること」、「新たに開発すること」の３つの資質・能力を育成し、人や考えをつなぎ、新たなものを創りだすための技法・技能を身に付けさせ、持続可能な社会についての認識を高めるとともに、その実現に向けて自ら行動しようとする実践的な態度を養う。

３　幼小中一貫カリキュラムの下に行われる「社会創造科」

幼小中を５つのステージに分け、それぞれの発達段階に応じたカリキュラムを系統的に編成した。幼小中すべての単元は、最終ステージの４つの大テーマ「ブランド」「まちづくり」「自然環境」「コミュニティ」へとつながる。

・第１ステージ（幼稚園３歳児～５歳児前半）では、様々な要素を含む遊びの経験を重視する。
・第２ステージ（幼稚園５歳児後半～小学２年生）では、身の回りの「ひと・もの・こと」と深くかかわる単元構成を行う。
・第３ステージ（小学３年生～４年生）では、地域と深くかかわる単元構成を行い、それまでの内容を系統的に整理し、統合する。
・第４ステージ（小学５年生～中学１年生）、第５ステージ（中学２年生～３年生）では、それまではぐくんだ地域への愛情・愛着をもとに、テーマを窓口に地域の問題をとらえ、持続可能な地域を目指し、地域の人と手を携え、実践的に問題を解決する大単元を位置付ける。

４　「社会創造科」で身に付けること

社会創造科では、前述の目標を受け、はぐくむ力等を次のように設定した。

①持続可能な社会に関する認識・態度
②持続可能な社会を創りあげる３つの資質・能力
③つなぎ創りだす技法・技能

①持続可能な社会に関する認識・態度

「持続可能な社会に関する認識」とは、第２、第３ステージでは、身の回りの「ひと・もの・こと」に目を向け、自分に引きつけながら深めた愛情・愛着を深めることとした。第４、第５ステージでは、自分を取り囲む社会の問題を解決することを通して獲得した、持続可能な社会の在り様を捉えていくこととした。

また、持続可能な社会を創りあげるには、はぐくまれた認識をもとに、自ら行動しようとする態度が不可欠である。

②持続可能な社会を創りあげる３つの資質・能力

持続可能な社会を創りあげるために特に系統的にはぐくむ資質・能力を３つ設定した。

「自己を推進すること」

自己を見つめ、「ひと・もの・こと」への愛情・愛着をもち、見通しをもって物事に取り組み、よりよい自分をつくること

「相互に交流すること」

対話を通して他者とかかわり、よりよい人間関係をつくること

「新たに開発すること」

自ら考えたり、他に考えを求めたりして、問題解決に取り組み、現状を突破するために、対象との新たなかかわりをつくること

③つなぎ創りだす技法・技能

つなぎ創りだす技法・技能には、以下のような役割を異にした２つの技法・技能を設定した。

・問題解決のために必要な人たちと良好な人間関係を築きながら人と人とをつなぎ、人的ネットワークを創りだす技法・技能
・身に付けてきた知識や見方・考え方をつなぎ、問題解決のための新しい発想や方法を創りだす技法・技能

これらの技法・技能を身に付けることにより、やがて他者と手を携えながら現代社会の複雑な問題を解決し、持続可能な社会を創りあげていくことができるようになると考えている。

以下は、発達段階に応じて、系統的・段階的に身に付けていく主な技法･技能を示したものである。

第２ステージ	第３ステージ
・比べる ・仲間分け ・２Ｗ１Ｈ	・表・グラフ ・ウェビングマップ ・５Ｗ１Ｈ
第４ステージ	**第５ステージ**
・マトリクス ・コンセプトマップ ・６Ｗ１Ｈ	・６Ｗ２Ｈ ・ＫＪ法 ・三角ロジック

５　「異年齢協働探究型学習」の導入

子どもが校園を卒業し、実際に社会に出て問題の解決に当たるとき、共に活動するのは、様々な年齢･考え方をもった人々である。社会創造科では、そのような場面で生きて働く力を身に付けさせるために、日常の学級の仲間を超えた人との探究的な学び、「異年齢協働探究型学習」を行う。

（１）「異年齢協働探究型学習」の異年齢とは

「社会創造科」では、次のような人たちと手を携えて学習を進める。

○ステージ内の園児・児童・生徒
○ステージを超えた園児・児童・生徒
○地域の高校、高専、大学の学生および研究者（専門的な研究をしている人）
○地域で実際に問題解決活動に取り組んでいる人（ＮＰＯ、行政、企業など）

ステージを構成して学習を進める「社会創造科」では、学級や学年の仲間を越えて学習を行う。年齢差のある仲間同士が、同じ目標に向かって互いの意見や考え方を尊重し合い、すり合わせながら学習を進める。これにより、年上の者が年下の者の意見を新たな価値として取り入れたり、年下の者が年上の者の立場を考慮した態度や憧れを抱いたりする力のはぐくみが期待できる。

また、地域の問題を実際に扱う過程で、地域の人と学習を行う。地域の人とは、専門家や実際に問題解決活動に取り組んでいる人を指す。子どもたちは、実際に問題に直面したり、解決場面に立ち合ったりする学習を通して、「社会創造科」の学

習内容を確かに身に付けていくことが期待できる。また、関わった地域の人たちには、次のような恩恵があるものと受けとめている。

・自分たちの専門とする分野・領域の価値を、後に続く世代に伝えられる。
・直接の消費者である小・中学生の声を取り入れたり、新たな視点や発想を得たりすることができる。

このように、地域との学習は、実社会の中で児童・生徒を育てるだけでなく、学校と地域とを密接に結び付け、地域の教育力を高めていくことが期待できる。

（2）「異年齢協働探究型学習」での協働とは

ここでの協働とは、問題解決過程のある段階で異なる見方・考え方・表し方をもつ他者（同年齢・異年齢）とかかわり、相互にプラスの影響を受け合いながら（＝互恵的なかかわり）、知識・技能の獲得および、資質・能力の高まりに迫ることを指す。「社会創造科」では、子ども同士、子どもと地域の人など、かかわり合うもの同士が互恵的なかかわりを築きながら持続可能な社会を創りあげる資質・能力を高め合うことが期待できる。

（3）「異年齢協働探究型学習」の探究とは

「社会創造科」は、問題解決の学習プロセスを「①知る　②調べる、まとめる　③考える　④行動する　⑤評価する」と設定する。それぞれのプロセスには、用いる技法・技能、働かせる資質・能力、高める認識・態度を明確にし、系統的に学習を進める。これらは不可逆的なものではなく、往復を繰り返しながらスパイラルに進んでいく。

①　知る

問題と出合うプロセスである。地域の問題を自分のこととして引き付けて捉えさせる。

②　調べる、まとめる

問題を焦点化し、課題を設定するプロセスである。地域の問題に関する歴史、現状、事実、意識を調べ、結果をまとめ・分析・焦点化し、追究課題を設定させる。

③　考える

問題を解決するための方法を考え、追究計画を作成するプロセスである。多様な見方で問題点を見つめ、解決する方法を見出し、発想し、追究計画を作成させる。

④　行動する

地域の人とともに問題を解決する活動を行ったり、地域に計画を提言したりするプロセスである。社会創造科のプロセスモデルは、「④行動する」を有することが最大の特徴である。地域の問題解決に向けて実際に行動を起こす、いわば「Act locally」には、地域の人と手を携える必要があり、継続的なかかわりが必要である。その中で、自ら問いを立て、実践を通して解決し、新たな問いを生み出していく、スパイラルな学び、探究型の学習を進めながら学習内容を身に付けていくことをねらっている。

⑤　評価する

活動を振り返るプロセスである。活動の成果や課題、有効だった問題解決方法をまとめ、次の活動に反映させる。

このように「異年齢協働探究型学習」を手だてとして社会創造科に導入することで、子どもたちは、ステージ内・外の仲間や地域の人と問題を共有し、共に解決の方法を考え、実践することで互恵的なかかわりを築いていく。また、地域と密接にかかわる探究的な学びの中で、現実の問題に直面することで、その問題をより自分に引き付けて捉えたり、問題を解決する過程を経験したりすることができる。特に、地域と継続的にかかわることで、その学びは繰り返され、学習は探究的に高まっていくと考えた。

Ⅱ　「社会創造科」の実践

ここでは、中学校で行われた第４ステージと第５ステージの実践を紹介する。

＊大テーマ「ブランド」、小テーマ「地場産物」（長岡野菜）についての実践である。
＊当校園では、他に「自然環境」「まちづくり」「コミュニティ」を大テーマとして設定している。

1　第４ステージの活動

追究テーマ：「長岡野菜の実態を知り、課題解決のための提案をしよう」

独特な食感・風味をもち、戦前から愛され続けてきた長岡が誇る伝統野菜「長岡野菜」をブランド化す

る活動を通して持続可能な長岡の在り方を追究した。

本実践では、「長岡野菜の魅力を生かし、そのおいしさを多くの人に楽しんでもらいたい」「長岡野菜のブランド化を図りたい」と願う地域のホテルの料理長をお招きし、ブランディングや長岡野菜の魅力等について学んだ。この活動を通して学びとったことを小学生と共にまとめ、自分たちのアイディアを創りだし、料理長に提案した。

グルーピング・計画立案

◎小・中でグループを組み、計画をつくろう。

調べ活動・質問準備

◎長岡野菜について、知っていることを整理し、訪問した際のインタビュー項目を考えよう。

校外活動（訪問）

◎長岡野菜の生産と販売の実態を捉えよう。

- **「料理長の話を聞いて、長岡野菜を使った料理には、震災を復興してくれた人への感謝の気持ちが込められているということを知った。」（小学生の振り返りより）**
- **「生産者の話を聞いて、長岡野菜にはとても気持ちが込められいるのだとわかった。長岡野菜の特徴を一つでもなくさずに、レシピを考えていきたい。」（中学生の振り返りより）**

★「相互に交流すること」が働いた場面

提案づくり

◎調べたことを生かして、提案「長岡野菜の特長を生かしたレシピ」をつくろう。

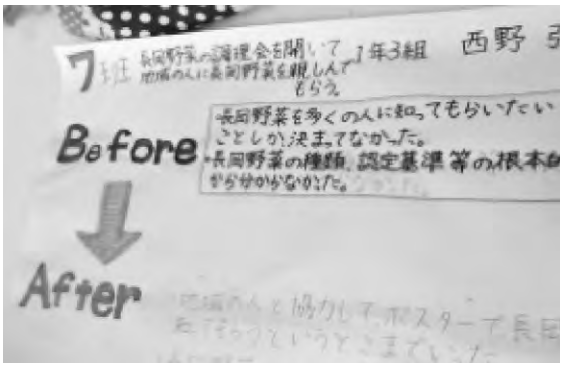
中間のまとめ

◎調べたこと、分かったことを「Before－After」でまとめよう。

調査する前と調査した後を比較するためBefore-Afterの視点でまとめさせた。

- **「かぐら南蛮がジャムとして売られていることに注目した。加工・保存の視点から、ジャム＋クッキーでレシピを考えていくことにした。」（中学生の振り返りより）**

★「新たに開発すること」が働いた場面



提案と評価のフィードバック

◎地域の方にプレゼンし、専門的な意見をもらおう。

地域のホテルの料理長をお招きし、自分たちの考えを提案した。

- **「小中学生が長岡野菜のことを考えてくれるのがうれしいと言われた。これからも、長岡野菜を追究していきたい。」（中学生の振り返りより）**

★「新たに開発すること」が働いた場面

２　第５ステージの活動

追究テーマ：「地域の宝　長岡野菜のブランド化を通して持続可能な長岡をめざそう」

第５ステージでは、同じ追究課題を設定した中学２年生と３年生がグループを編成し、長岡野菜の魅力を伝えたい、長岡野菜を守りたいと考えている地域の人と思いや願いを共有し、問題解決のためのアイディアを検討、実践する中で、地域の人と互恵的なかかわりを築きながら活動を進めた。

Ａグループの実践

追究テーマ

多世代に好まれる長岡野菜の料理を考える

協働する相手

イタリアンレストラン

主な活動とねらい

長岡野菜を使ったメニューの開発を通して、たくさんの人にそのおいしさを知ってもらう

主な学び

・長岡野菜の使用にこだわりをもつ社長と願いを共有し、協力してメニューを開発に見通しをもつこと

★「自己を推進すること」の発揮

★「相互に交流すること」の発揮

・ブランディングに必要な視点（素材の良さを生かす等）を獲得し、それを基にメニュー開発のアイディアを生み出すこと

★持続可能な社会に関する認識の高まり

★「新たに開発すること」の発揮

・メニューを開発する過程とその厳しさを体験できたこと

Ⅲ　成果と課題

1　成果

生徒の活動はマスコミにも取り上げられ、地域からの期待や評価も高い。子どもたちは、地域の企業や団体と協働し、イベントの企画や商品の開発など互恵的なかかわりを築きながら、持続可能な社会に必要な認識（多世代・他文化理解、特長を生かす、優位性、共生、交流等）をはぐくんでいる。

2　課題

生徒による持ち込み企画等の検討や実施について、多くの各種団体や企業から理解・協力をいただくことが課題である。

おわりに

「社会創造科」を学んだ卒業生が書いた卒業文集を紹介して本稿を終えたい。

「今の日本は数十年間に比べて元気がない。それは、企業が世界規模の競争に負けているのが原因の一つだ。今やメイド・イン・ジャパンの信頼は揺らいでいる。ナンバーワンはいつか追い越されるが、オンリーワンは他との競争がないため、その地位を独占できる。（中略）新しい分野を切り開いて、他の分野に悪影響を与えないことが持続可能な社会には必要だ。会社の利益が増えても、それによって他の会社が倒産しては、日本さらには世界全体で考えた時には成長と言えない。これからの企業は、ますます海外との取引が増えるだろう。英語はもちろん、中国語やインド語も使える必要があるだろう。」

私たちは、このように持続可能な社会の在り方について堂々と語り、卒業後も学んでいく必要感や意欲をもてる人材を育てていきたい。

高　等　学　校　賞

立命館守山高等学校
教諭　田辺　記子

海外研修　国際ボランティアコース　―今、私たちにできること―

１．はじめに
―「世界をフィールドに学ぶ」本校の教育活動―

本校は、本物の体験を通じて自律・協調の心を育むことを教育実践目標の一つとして掲げており、国境を越えて活躍できる実行力とコミュニケーション能力の育成に取り組んでいる。毎年、海外の学校からの訪問や留学生を受け入れ、国際交流の機会を積極的に設けているほか、2009年には世界各国から高校生が本校に集い、「高校生国際みずフォーラムin湖国・滋賀」を開催した。また、３年生で行われる学校設定科目「国際協力」では、政府関係者、NGO・NPO団体、民間企業の方々をお招きし、様々な形での国際協力について学ぶとともに、自分たちがどのように世界に貢献できるのかを考え提案していく授業を行っている。このように、本校では日頃よりESDの観点や国際感覚を養う機会を多く設けているが、中でもその集大成となるのが、中学・高校の全員が体験する海外研修である。

創立８年目となる本校では、2012年度より立命館守山中学校からの入学生徒が高校３年生になるのを機に、海外研修のコース改変を行った。従来は、英語力・コミュニケーション能力の向上を重点においた２コースのみであったが、そこへ多様化する国際社会に対し生徒自らの得意分野で挑戦できるよう、インターンシップコース、環境調査コース、国際ボランティアコースの３つを加えることが検討された。結果、それぞれシカゴ、タスマニア、バンコクで実施することとなった。この報告は、本校アカデメイアコース生が３年次に行った海外研修のうち、国際ボランティアコース（以下バンコクコース）が実践した活動（主に2013年度）を記録したものである。

２．ねらい

バンコクコースは、アメリカのジョージア州に本部を置く国際NGO「Habitat for Humanity International（以下ハビタット）」の日本支部より全面協力を得て行われている（コースを具体化するにあたっては、①活動を主催する団体の信頼性、②研修地の治安状況、③活動内容の安全性・受け入れ態勢、④活動内容の充実性の４点に留意した）。ハビタットは、A world where everyone has a decent place to live（誰もがきちんとした場所で暮らせる世界）という理念のもと、世界の貧困住居問題の解消を目指し、約80の国で住居建築を通じた支援活動を行っている。人種、宗教などの個人的背景に関係なく、安心して暮らせる家を必要としている低収入の家族、また災害で家を失った家族に住居支援を展開しており、これまでに80万世帯余りの家族に家を建築、修繕するなどの支援を行ってきた。

ハビタットの活動を主軸とした本コースの研修目的は以下の３点である。

①ハビタットの理念を理解し、実際の活動を通じて「貧困」が家族や地域に及ぼす影響について学ぶとともに、今「自分たちにできること」を考える。

②現地の自然や文化、習慣、歴史、社会制度に関する認識を深め、異文化理解を図るとともに、日本や自分たちの置かれている環境に対する客観的な視点を養う。

③学校生活で培ってきた自立心・自律心を異なる環境下で応用することで、「生きる力」を強化する。

ハビタットを通じての活動で最も大切なことは、「家を建てること」そのものではなく、「高校生にできる国際協力を実践する」というところにある。海外の人たちの暮らしを肌で感じ、「そこに住む人々が本当に必要としていることは何なのか」、「その人たちのために自分たちができることは何か」を考えることがこの研修の最大の目的である。そ

して、帰国後はそこで得た体験を自分たちの実生活と関連付けさせ、今後どう生かしていくのかを考えさせるコースとしている。

３．研修概要

・滞在先：バンコク（ホテル滞在）
・研修先：パットゥンタニ、アユタヤ、バンコク
・期　間：13日～14日間（８月）
・生徒数：25名前後
・引率教員：２名
・添乗員：１名（近畿日本ツーリスト）

本コースはハビタットによる海外建築ボランティアプログラム活動（以下GV、Global Villageの略）とそれ以外の交流・文化体験活動（以下R&R、REST＆RELAXATIONの略）で構成されている。

行程作成にあたっては、GV活動日を確保し、ある程度家の形ができるまでを目標としつつ、生徒の体力的負担が大きくならないように配慮した。

日次	日付	曜日	活動内容
1	8/18	日	出発・オリエンテーション
2	19	月	GV1 日目
3	20	火	GV2 日目
4	21	水	プラティープ財団訪問、市街研修
5	22	木	GV3 日目
6	23	金	GV4 日目
7	24	土	GV5 日目、生活実態調査
8	25	日	アユタヤ（世界遺産見学）
9	26	月	GV6 日目
10	27	火	GV7 日目、デディケーション
11	28	水	水上マーケット、サイクリング
12	29	木	バンプリ高校訪問
13	30	金	帰国

４．事前学習

４月～７月に、土曜講座として６回（１回＝４時間）の事前学習を設け、現地で必要となる知識や前もって考えておきたいことなどを学習した。事前にどれだけ深く考えるかによって、現地で得られる内容も大きく変わると考えたことから、生徒主体の活動となるワークショップなどを積極的に取り入れた。主な学習内容は以下の通り。

①コース概要説明、②ハビタットについて（ハビタットスタッフによる講義とワークショップ）、③ディスカッション「なぜ東日本被災地ではなく、タイへ行くのか」、④バンコク市街観光計画、⑤プラティープ財団について（スラムの現状と課題、財団の活動内容、園児との交流企画）、⑦アユタヤの歴史、⑧タイ語講座（NPO法人日本タイ文化教育交流協会スタッフ、タイ人留学生による講座）⑧タイ料理体験、⑨結団式など。

③は事前学習の中でも、重きを置いたテーマの１つである。生徒の考えは、「東日本に行くべきだ」と「タイに行くべきだ」の半々となった。「東日本に行くべき」と答えた生徒が、帰国後どう考えを変えるのか、現地へ行ってどういう感想を持つのかという点が成長のポイントとなった。また⑤については、なぜ貧困が生まれるのかということをスラム街での学習だけにとどめるのではなく、現地で自分たちのホームオーナーの生活と関連させて考えることができていた点で、有意義な事前学習となった。

５．実践（ここではGV活動の紹介のみとする）

○１日の流れ

6：45　教員集合　@朝食会場
7：00　朝食（生徒点呼・体調チェック・日誌提出）
7：50　ロビー集合
8：00　ホテル出発
9：10　サイト到着
9：20　オリエンテーション
　　準備体操
　　ワーク開始

10:30　休憩

・休憩は時間に関係なく、作業の状況に合わせて適宜とった。
・熱中症対策には最も気を遣い、こまめな水分・塩分補給を心掛けた。

10:40　ワーク開始
11:25　休憩
11:35　ワーク開始
12:00　昼食
13:00　ワーク開始
14:10　休憩
14:20　ワーク開始
15:15　終了・片づけ
15:40　サイト出発
17:10　ホテル着
　　フリータイム
18:30　夕食
19:30　ミーティング
20:30　解散
21:30　就寝

夕食後に毎日行われるミーティングは、生徒同士意見を交わし、その日のできごとをはじめ、この研修の意義全体について考えを深めるためには欠かせない。司会進行も生徒が行い、班ごとに①良かった点、悪かった点（及び改善策）、②注意されたこと、危険だったこと、困ったこと、③パーソナル情報（スタッフやオーナー、大工さんたちのことで知り得たこと）を出し合い、その後全体で共有しまとめる。

サイトではどうしても目の前の作業に集中してしまうため、自分たちの活動を客観的に捉える時間を作ることで、本来の目的を忘れることなく、また個々に新たな目標を見つけながら作業に取り組むことができる。生徒たちはのちにこのミーティングを「もっとも充実した時間だった」と振り返る。教員は生徒が毎朝提出する日誌の中から、気持ちの微妙な変化や何気ない疑問などを読み取り、それをミーティング内の話と織り交ぜながら提示することで、数々の「仕掛け」をつくることが最大の任務となる。研修が成功するか否かはこの時間の使い方如何に左右される。

○作業開始前日【オリエンテーション】

ホテルにてハビタットの現地スタッフ・日本人スタッフと対面し自己紹介やあいさつを行った後、より具体的な活動説明、ホームオーナー（建築される家に住む人）情報や注意事項を聞き、明日以降の作業に備える。

≪ホームオーナー情報≫

オーナーは２人の子を持つ母親で、自分たちの家はなく、実家を間借りして生活をしている。２年前におきた大洪水の後、彼女の姉妹らも含め計８人で暮らしており、家は狭い。また、この一家の生活を支えるのは工場勤務をするオーナーの収入のみであり、８人で暮らすのには十分とはいえない。しかし、子どもたちが大きくなるにつれて、落ち着いて暮らせる家が必要だと強く感じるようになり、ハビタットに申し込んだ。

○１日目【床枠づくり（ワイヤーワーク・セメント流し込み）】

作業は家の屋根と柱だけがある状態から始める。家のサイズはタテ９m×ヨコ６m。

家の床となる部分の外枠基礎（ビーム）を、鉄の棒とワイヤーで作る。

〈オーナーと共に〉

できあがったビームを家の外周に設置する。

その後、水や砂と混ぜ合わせながらセメントをつくり、ビームの中に流し込む。セメントはバケツリレーで協力し家の中まで運ぶ。セメントはかなりの量が必要になるので、「作る」・「運ぶ」を班で交替しながら行う。

○２日目【床枠・床づくり】

まずは昨日の続きの床枠づくり。続いて、できあがった枠と同じ高さになるまで土を敷き詰め、床をつくる。土はバケツリレーで運び、運ばれた土を踏み固めていく。半分ほどできた時点で終了。

○３日目【床づくり、壁づくり】

残り半分の床をつくり完成。その後、壁となるブロックの積み方や接着のためのセメント作り（床部分とは水や砂の量が異なる）を教わり、明日以降の作業に備える。

○４日目【壁づくり】

昨日教わった方法で、壁となるブロックを積み上げる。６班中、常に１班がセメントを作るようにローテーションを組み、作業を進める。

○５日目【壁づくり】（半日作業）

作業は昨日同様壁づくり。土曜日だったため、近所の子どもたちがサイトに遊びに来ていた。この地域に日本人が来ることは珍しく、初めて見る「外国人」であった子どもたちも多い。生徒はそうした子どもたちにタイ語を教わったり、サッカーをしたりと休憩時間を利用して積極的にコミュニケーションを取っていた。

しかし一方で、作業の進捗状況は思わしくなかった。オーナーさんを思い、慎重かつ丁寧に進めていたが、作業スピードの遅れをスタッフに指摘された。日本人が世界に誇る「丁寧さ」。しかし、どんな活動にも時間に限りがあることを生徒たちは痛感し、GVに対する思いを新たにするとともに不安と後悔に押しつぶされそうになっていた。

○６日目【壁づくり】

作業はひたすら壁を積み上げ、家を完成（生徒でできる部分のみ）させること。高所での作業はヘルメットの着用を義務付ける。想いが募り作業が続行しがちになるが、炎天下での作業となるため、体調の管理も重要な課題となった。

丁寧さとスピードに折り合いをつけながら時間

との勝負となったが、結局明日の引き渡しまでには完成できないことを知った。夜のミーティングは「自分たちがここに来た意味」を様々な角度から改めて考える時間となり、答えのない問いに真摯に向き合う生徒たちの姿が見られた。

○７日目【壁づくり・デディケーション（家の引き渡し式）】

午前中は、ブロックを少しでも高く、１つでも多くと壁づくりの作業を黙々と進めた。その後昼食をはさみ、デディケーションと呼ばれる家の引き渡し式を行った。「鍵」を渡しテープカットをすると、この家はオーナーさんのものとなる。

オーナーさんから感謝の言葉をもらい、彼女の目から大粒の涙がこぼれたとき、生徒たちの心の中で何かが変わった。

〈生徒の日誌より〉
セレモニーが始まってなんだか完成していない家を見ると自分がすごくちっぽけに感じた。でもマムさん（オーナー）が泣きながら感謝してくれた時、少し気持ちが晴れた。この人に幸せを与えられた自分を少しは認められた気がした。

最後のミーティングでは一人ひとりが自分の今の想いを語り、この経験を通じて「より良い未来を築くにはどのような力が必要か」について話し合い、活動のまとめとした。

６．事後学習

帰国後に、今回の研修の振り返りを行った。活動内容は以下の通り。

①「JICAグローバル教育コンクール　写真・映像部門」への出品
②報告用研修スライドショーの作成（記録係）
③校内プレゼンテーション大会への参加（研修内容ではなく、研修を通じて得た疑問や、それに対する自分たちの考えについて発表）

この研修で得た貴重な「体験」は、自分の成長の糧とすることはもちろんであるが、個々の内にとどめておくのではなく、「表現する」力を養うとともに様々な人に知ってもらうということが重要である。「発信」することで今回の活動が他者への刺激となり、次なる「行動の輪」へとつながることを理解させる。

７．おわりに

「このろくでもない、すばらしき世界」。とある缶コーヒーのCMで宇宙人が地球をこう評す。この世界の「ろくでもなさ」と「素晴らしさ」の両方を知った時、初めて持続可能な社会を築くことができるのではないかと私は思う。そのために、生徒たちにはその両方を知ることのできる「本物の体験」が必要なのではないだろうか。

この研修ののち、世界の貧しい人たちのために安くて丈夫な家を建てたいと「建築」を進路に選んだ者、国際理解のための平和プログラムセミナーに参加した者、冬休みに東北の震災ボランティアに行く者など、各自が自身の将来と向き合い、確実な歩みを進めている。そうした行動の一つ一つが、持続可能な社会への一歩へとつながっていくのだろう。己の「無力」と「可能性」から目を背けず、常に自分たちの「最大限」を表現できる彼らでい続けてほしいと願う。

＊2012年度の活動は「JICAグローバル教育コンクール2012受賞作品集」に集録されている。

審査委員特別賞

岡山県立和気閑谷高等学校
教諭　定金　龍輔

１．はじめに

本校、岡山県立和気閑谷高等学校は山陽本線沿いの岡山県東部に位置し、周りを緑に囲まれた静かな環境にあります。日本最古の庶民のための学校として1670年に創られた旧閑谷学校を源流にもち、今年で創立343年目となる伝統校です。普通科とキャリア探求科を擁し、旧閑谷学校の儒学の精神を継承しつつ、それぞれの特色を活かしながら、個性豊かな人材を育成することを教育目標としています。そのため本校では全校集会時等に年間10回程度、論語朗誦を行うなど、論語学習を教育活動に取り入れ、「仁」「恕」の精神をもって地域と共に成長しています。

▲全校で行う論語朗誦

また、旧閑谷学校で行われる孔子を祀る儀式「釈菜（せきさい）」には、本校の教職員は祭官として、生徒は受付や接待などの担当として参加し、旧閑谷学校の精神を受け継いでいることを体験します。

▲本校の教職員が祭官を務める釈菜

２．きっかけ

本校のボランティア活動が生まれたきっかけは、日頃からお世話になっている地元地域に少しでも貢献したいという有志生徒の声でした。旧閑谷学校は、本校のルーツであり、１・２年次では国宝に指定されている講堂で論語朗誦を行う等我が高校にとって大切な歴史遺産です。本校独自の活動を模索する中で、「閑谷ボランティアガイド」は生まれました。これは主に休日に行います。理想は毎日地域に貢献するということから、次に加えられたのが「学童ボランティア」です。平日もボランティアを行うことができ、閑谷ボランティアガイドと合わせて、理想が実現しました。さらに地域に貢献するため「エコキャップボランティア」を始めました。輸送や洗浄にかかる費用を考えるとコストパフォーマンスに優れているとは言えませんが、この活動をきっかけに地域と結びつきやすくなると考えました。

３．活動内容

（１）閑谷ボランティアガイド

観光スポットである旧閑谷学校を訪れる観光客の方をガイドするものです。私たちにとっては身近な場所ですが、観光客にとってはもう訪れることがない場所かもしれません。その一期一会の思い出を最高のものにしてもらうために、高校生がそのお手伝いを行います。

▲高校生の説明に観光客は聞き入っています

（2）学童ボランティア

地域の学童保育のお手伝いを行うボランティアです。主に勉強を教えたり外で一緒に遊んだりします。小学校の３年生までが対象の学童保育ですが、児童は非常に活発なため、高校生が相手をしてくれると非常に助かると職員の方からも感謝の言葉をいただいています。そしてなにより、児童は高校生を心待ちにしてくれています。

▲児童たちは高校生と楽しく勉強もします

（3）エコキャップボランティア

ボトルキャップを回収、洗浄し日本赤十字社を通じてポリオワクチンに換える活動です。上記の学童ボランティアで生まれたつながりを活かし、昨年度より小学校との連携が生まれました。現在は町役場や地域の方にも回収の協力をしていただき、今年度は20万個に迫る数が集まりました。この活動はボトルキャップを集めることだけが目的ではなく、この活動を通じて地域と連携することがもうひとつの目的です。

▲日本赤十字社を通じて世界とつながります

４．取り組み

本校のボランティア活動の大きな特徴のひとつは生徒会が主催していることです。それまで担当者がそれぞれいたボランティア活動を2011年から生徒会が一括して取りまとめるようになりました。これは魅力的な活動が、担当者の転勤などで廃れないようにすることと、生徒に自主的・自律的運営させることが目的です。生徒会総務のボランティア担当者が、ボランティア活動の紹介、活動の参加希望者への説明会、募集用書類の作成、参加者の取りまとめ、さらには活動の場となる外部の担当者との連絡まで行っています。主催し始めたころはまだまだ教員のサポートが必要で、どうしても教員の指示を待つことが多かったのですが、現在では自ら積極的に動き、新しい取り組みなども提案するようになりました。

本校の活動は、総合的な学習の時間などを活用としたものではなく課外活動であり、本当の意味で「ボランティア」です。そのため、最近は参加者が横ばいとなっています。この原因の一つとして、生徒会のボランティア担当者が質の向上を掲げ、説明会等でも多少厳しい話をしたこともあると考えられますが、活動が熟成されつつある証だとも考えられます。

本校のボランティア活動は、年に数回のイベント的なものではなく、恒常的に行える特徴があります。継続的に経験を積み重ねることができるので、その成長機会は無限にあると思います。

５．活動の成果

本校でしかできない活動は閑谷ボランティアガイドです。ここでは特にこのボランティア活動を取り上げて成果を述べます。

以前は個々に調べた情報をまとめて、それぞれがガイドを行っていましたが、ガイドの質の向上と初心者への指導のために、ガイド経験者らがアイデアを出し合い、基本的な知識をまとめた「ガイド本」を作成しました。ガイド初心者はこれを持ってガイドを行います。

活動の最初に初心者はこのガイド本を持ってガイド経験者に実際にガイドしてもらいます。その後経験者とチームを組んで実際に観光客を相手にガイドを行い少しずつ慣れていきます。ガイドを行う前は不安を感じていた生徒も、思っていたほど難しくないことや先輩のサポートに安心感を持ち、観光客との出会いを楽しみながら活動を行え

▲活動はこのガイド本から始まります

るようになります。

活動を重ねるうちに、観光客の要望を生徒同士で共有し、さらに質の向上を考えるようになりました。まずはそれまでガイドを行う中で話だけで行っていたものを、写真などで紹介しながら行うようになり、さらに写真だけではなく音声も用いたいと考えるようになりました。そこで考え出されたのがタブレット端末を用いたガイドです。

▲タブレットが活躍しています

このコンテンツ作成には当初htmlを用いたものにすることで、多くのタブレット端末やweb上で活用できるのではと考えました。しかし、今後のことを考えた場合、htmlで作成すると改訂できる生徒が限られてしまうのではという懸念が生まれました。あくまでもこの活動は生徒の成長の場でなければなりません。そこで、多くの生徒が授業でも学び、生徒の活用機会の多いパワーポイントでコンテンツを作成することにしました。

イラストを描くのが得意な生徒やパワーポイントに慣れている生徒、旧閑谷学校のことをよく知っている生徒が協力して完成させました。現在はまだ台数が限られているため、全員が活用するには至っていませんが、今後は台数を増やすことを計画しています。また、旧閑谷学校を世界遺産に登録させようという動きもあり、今後は外国からの観光客も増えることが考えられます。そのため、本校の英語研究同好会と一緒に英語の紹介文を作成し、英文ガイドが行えるように動き始めています。

▲ガイドコンテンツのホーム

▲▼ガイドコンテンツのリンク

このように、観光客の要望を取り入れ、自分の得意な分野や学校で学んだことを活かして改訂を続けるようになりました。

6．外部からの評価

近年、本校のボランティア活動は、近年多くの取材を受けています。ユネスコのwebページに、本校の取り組みがESDの成功例４つのうちの１つとして紹介された（本校HPよりリンクありhttp://www.wakesizu.okayama-c.ed.jp/unesco_esd.html）ことをはじめ、ボランティア賞もいただき、テレビや新聞、ラジオなど様々なメディアで取り上げ

られ、生徒は自分達が行っている活動が地域のみでなく、世界でも認められていることを実感し、自信へとつながっています。

UNESCO
United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization

ESD
Education for Sustainable Development

Success Stories

Japan: "It changed the way we see the world"

by Hiroki Yanagisawa

Tourists walking around the historic tourist site of Shizutani School in Japan, a registered national treasure, experience something extraordinary. Several high-school students offer to be their guide.

"We students work with the local council and provide a voluntary tour of Shizutani School site", says Fumika Morioka, a 12th-grader. Morioka, a member of Wake Shizutani High School's student council, is in charge of coordinating student volunteers.

© Wake Shizutani High School

Shizutani School, located in a suburb of Okayama, is the first school in Japan that opened to the general public in 1670. In those days, access to education was limited to a small privileged class. But Mitsumasa Ikeda, the domain lord of Bizen, created an academic institution providing everyone with the opportunity to study. He built Shizutani school based on the principles and teaching of Confucius. To this day, the school keeps up this educational tradition and teaches Confucianism within the classroom.

In 2006, the school decided to make use of its heritage as an extracurricular activity for students. "Because of its traditional architecture and atmosphere, the original site of Shizutani School, located 10km away from our school, is a popular tourist site. Considering our history and the fact that all the students study the history of our school in depth, the school came up with the idea to offer Shizutani School student tour guides for tourists," says Ryusuke Sadakane, a teacher in charge of the student

▲ユネスコのwebで紹介された一部

さらにこれらの活動は広がっていきます。

平成25年2月3日に、旧閑谷学校世界遺産登録推進室・備前市・備前市教育委員会が主催し、教育の尊さについて考えようという「『まなび』フォーラム」が、旧閑谷学校に併設されている岡山県教育センター閑谷学校で開催されました。主催者から依頼され、本校の生徒会が論語朗誦を披露したり、ボランティア参加者が講師で来ていたカンベンカ・マリールイズさんをガイドしたりしました。340年前の庶民のための学校の精神が今につながっていることにマリールイズさんは大変感動され、

▲生徒会全員で論語朗誦

ご自身が本国ルワンダに創設させた学校を本校のようにしたいとおっしゃってくださいました。

本校の活動が地元地域にも周知され、今年度は多くの依頼が本校に集まっています。駅前のイベントへの参加依頼をいただいたり、地元の複数の商店が店頭にスペースを設け本校の活動の発表の場を提供してくれたりと、学校と地域と行政が一体となって地元を盛り上げていこうという動きが生まれています。

▲店舗の一部を改修してまで設置してくださいました

▲児童からのお礼の言葉

このように、私たちから発信するだけでなく、地域からも依頼や支援をいただくという、双方向性が生まれてきました。これは当初の目的であった地元地域に貢献するという目的は果たしつつあることの証だと考えます。

7．今後の課題

生徒は次のように感想文を書いています。

「私たちはこの活動を通し、普段の学校生活では学びにくいことを学んでいると思います。

閑谷学校にはお年寄りからお子さんまでの幅広い方々が来られます。その中で私たちが特に気を付けなければならないことは、相手に合わせたガイドをするということです。適切な、話す速さ・

言葉づかい・歩く速さなどは、それぞれのお客様によって違いがあります。短いガイドの時間の中で、閑谷学校の説明と私たちの思いを伝えることはとても難しいです。しかしガイドを重ねるうちに、工夫すれば、お客様は、より関心を持って私たちのガイドを聞いてくださることに気が付きました。

また、お客様に満足していただくために、紹介する部分の拡大した写真を準備したり、しおりを見せたりするなどの工夫を準備しています。完璧でないかもしれないけど、私たちらしいガイドをして、お客様に喜んでいただいています。

そして、この閑谷学校は、私たちの学校「和気閑谷高校」のルーツです。ガイドをしながら和気閑谷高校の紹介もできます。学校の歴史を一から学び直し、それをお客様に伝えることで、私たち自身母校の魅力に気が付き、歴史ある母校を持っていることに誇りを持つことができます。

このように、このボランティアガイドを通じて、様々なことを経験し、工夫し、喜ばれるという、学校ではなかなか経験できないことを経験することができました。」

▲ガイドをしながら学んでいます

また、このボランティアに参加している生徒がユネスコスクールの国際交流プログラムに参加した際の感想文を紹介します。

「私は様々な文化を理解することが持続可能な未来につながると聞いて、まず驚きました。（略）それならば、今私がやっている『閑谷ボランティアガイド』も関係していると考えるようになりました。互いの文化を理解して尊重し互いを認め合うことは、文化と文化がつながりを持ち続いていくということだと私は考えます。そして、続いていくということは、その文化・歴史・伝統が人から人へ受け継がれるということです。

この考えに至ったとき、私は自分の将来の夢を見つけました。その夢とは、自分の生まれ育ったこの国・地域と、世界の様々な国・地域の文化を学び、それらを発信してたくさんの人に知ってもらう、文化交流の仕事がしたいというものです。」

このように、閑谷ボランティアガイドを通じて生徒は大きく成長しています。ESDの基本的な考え方には環境、経済、社会の統合的な発展のもとに様々なものがありますが、その根底にあるものは“相手を思いやる心（ハート）”だと考えています。これは、まさに「仁」「恕」の精神ですが、2014年のユネスコスクール世界大会の高校生フォーラムの準備セミナー等で学んだことでもあります。上記の感想文から生徒に着実にそれが身に付き、さらに発展させて自らの将来に結び付けたことまで伺えます。

普段の高校生活ではほとんど同年代としか関わりません。しかし本校の生徒会が主催している様々なボランティア活動は、保護者や私たち教員ではない大人の方や、自分達より小さい子どもたちと接することができるため、甘えることができない状況や規範意識を持って接しなければいけない状況を経験できます。またその姿と自分の未来や過去とを結び付けることもできます。活動から得られるものは非常に多いと思います。

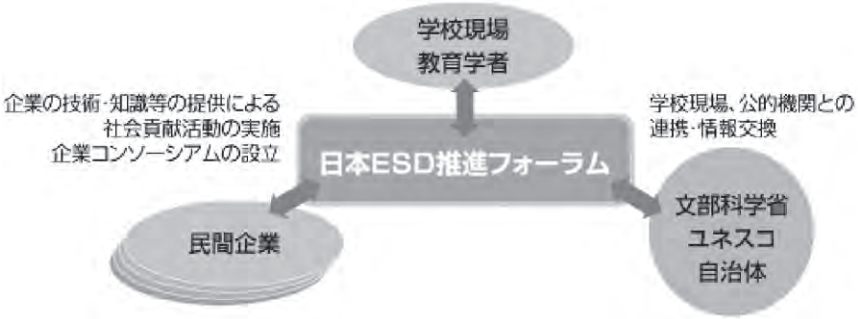
私たち教員のすべきことは、枠組みを作ることと、きっかけを与えることだと思います。ボランティア活動はもともと自主的に行うものですが、生徒の自主性だけに期待してしまうと、生徒が参加するチャンスを失ってしまいます。ボランティアの完成形を全校生徒がこれらの活動に自然に参加することとしつつ、教員が活動の価値を認識し、ほんの少しでいいので背中を押して生徒へ参加の促しを行うことが大切だと思います。

今後もこれらの活動が少しずつ進歩しながら何十年も持続するよう、あえて歩みを速めることなく、論語にある「温故知新」を胸に、生徒自身が発展させる活動をサポートしていきたいと考えています。

ＮＰＯ法人日本持続発展教育推進フォーラムについて

NPO 法人日本持続発展教育（ESD）推進フォーラムは、発想豊かで、柔軟性に富んだ早い時期から、ESD を取り入れることが大切だと考え、持続可能な社会を担う人として、具体的なビジョンを持った子どもの育成を目指し、2009 年 5 月に発足いたしました。

「社会の担い手を育てるため、ESD を教育現場へ推進する」という共通の目標のもとに、産・官・学が共同するための橋渡し役となって活動しています。



主な活動

■教育関係者へ向けた活動

学校教育の現場で ESD を普及していくため、主に教員を対象にした研修会等を全国各地で開催します。

■ユネスコスクールの普及

ユネスコスクールの目指す研究テーマと ESD のテーマが一致していることから、文部科学省及び日本ユネスコ国内委員会では、ユネスコスクールを ESD の推進拠点として位置づけ、加盟校の増加に取り組んでいます。当 NPO でもその活動をサポートしています。

■社会全体で子どもを育てる仕組みづくり

企業や自治体・団体等の力で『持続可能な社会づくりと担い手』をどのように育成していくか考え、実行していきます。

■ユネスコスクール全国大会 持続可能な開発のための教育（ESD）研究大会 の実施

ユネスコスクール、教育関係者、自治体･団体、企業関係者がＥＳＤの実践研究について相互交流を図るとともに、日本における ESD の普及・発展を考える研修会を開催しています。

■ ESD 大賞

ESD を実践している、全国の小中高等学校の中から優れた活動に対し、ESD 大賞を贈ります。

■ホームページを通じた情報提供

ESD の実践紹介など、最新の学校現場の状況をお伝えしていきます。企業や団体・自治体などが制作した ESD の趣旨に合う教材を集めたネットライブラリを開設しています。

（NPO 法人日本持続発展教育推進フォーラム　ホームページ：http://www.jp-esd.org）

ぜひ

NPO法人 日本持続発展教育推進フォーラム

ホームページをご覧ください!

NPO法人 日本持続発展教育(ESD)推進フォーラムでは、
ホームページを使って、情報発信を行っています。

Facebookでも近況報告を行っています!

http://www.facebook.com/jp.esd

ESD研究大会

ユネスコスクール全国大会／ESD 研究大会の最新情報を掲載しています。

ESD大賞

すぐれたESDの取り組みを表彰しています。受賞校の活動の様子も掲載しています。

ESDライブラリ

企業の活動、企業が作成した教材を紹介しています。教材のダウンロードも可能です。

NPO法人 日本持続発展教育(ESD)推進フォーラム

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-40

TEL:03-3295-7052 FAX:03-3295-7054 E-mail:info@jp-esd.org

http://www.jp-esd.org/ ESD推進フォーラム 検索

第４回ESD大賞
受賞校実践集

発行日：平成26年３月１日
発　行：ＮＰＯ法人日本持続発展教育推進フォーラム
http://www.jp-esd.org
〒101-0051　東京都千代田区神田神保町1-40
Tel ：03-3295-7051
Fax：03-3295-7054
E-mail：info@jp-esd.org